

枕草子

コジマミオコ訳

小島

滯子



はじめに

古典というだけでなんだか敬遠されがちですが、『枕草子』は本当に魅力的な作品です。

私は時々ページをめくって、彼女の言葉を読み返します。

花の色、風の音、空の様子、
日常にあふれる小さな幸せ、友情、恋。

そういうことは今も昔も何も変わらないのです。

桃尻語訳や田辺聖子さんの小説「むかし、あけぼの」など、
現代の言葉に替えたものは以前からあるのですが、
私は私なりのとらえ方で『枕草子』を表現したいと思います。

私が好きなものを好きな時に取り上げたものであり、
順不動で、分類も特にありません。

ここで少しでも『枕草子』の世界を感じていただけたら幸いです。
(2003年ごろに書いたものです。)

参考文献

新版「枕草子」上下巻 石田穰二訳注（角川文庫）

「古語大辞典」 中田祝夫・和田利政・北原保雄編（小学館）

春は

春は

春といえば、夜明け頃。

空がだんだん白んでいき、
山と空との境目がちょっぴり明るくなって、
紫がかった雲が細くたなびいている風景。

夏は

夏は

夏は、夜。

月夜の晩は今更挙げるまでもない。

闇夜でもやっぱり、
蛍がたくさん飛び交わすのなんて、
夏の風物詩としてふさわしい。

また、たった一匹、二匹が
ほのかに光って飛んで行くのも、いい感じ。

雨なんかが降る夜も、いい。

秋は

秋は

秋といたら、夕暮れ。

夕日がさして、山の頂に近くなる頃、
鳥が寝床へ帰ると言って、
三つ、四つ、二つ、と
飛び急ぐ姿までもが心に染み入る。

まして雁などの渡り鳥が連なって飛ぶのが
遠くに小さく見えるのは、すばらしい。

陽がすっかり沈んでしまった後、
風の声、虫の声などが聞こえてくる様子は
もう、今更言葉にすることもないだろう。

冬は

冬は

冬は、早朝。

雪が降っている時は
言うまでもないけれど、

霜がとても白い時も、
また、そうでない時も、
すごく寒くて、火を大急ぎでおこして
炭を御殿から御殿へ運んで行く光景も、
いかにも冬らしい感じだ。

だけど、
お昼頃、暖かくなって
寒さが緩んでゆくと、
炭櫃や火桶の中が
白い灰ばかりになってしまうのは、
見た目にうつくしくない、
って思う。

雪は

雪は

降るものは、雪。

あられ。

みぞれ。

みぞれは、好きじゃないけど、
白い雪が混じって降るのが、
おもしろい。

雪は、

檜皮葺きの屋根に降るのが、
すごくいい。

降り積もった雪が
少し消えかける頃や
それほど多く降らなかった時なんか
瓦の目ごとに雪が入って、
黒くまるく見えるのが、
とてもおもしろい。

時雨やあられは、板葺きの屋根に。
霜も、板葺きに、そして庭に。

檜皮葺きは、ヒノキの皮で葺いた屋根のこと。

滅多にないもの

滅多にないもの

舅に誉められる婿。

また、姑にかわいがられるお嫁さん。

毛がよく抜ける銀の毛抜き。

上司の悪口を言わない部下。

まったく欠点のない人。

見た目も中身も、振舞いもよくて、
周囲に少しも悪い印象を与えない人。

一つ屋根に住む者同士が、
互いに恥ずかしがって、
少しの間もないよう気を遣ったつもりでも、
実際にボロを出さずに済むことは、
滅多にない。

物語、歌集などを書き写していて、
元の本に墨をつけずに済むこと。
豪華本などは、それはもう心して書くけれど、
きまって汚してしまうものみたい。

男と女でも、女同士でも、
「永遠に」と誓った仲が
本当に死ぬまで続くことも、
滅多にない。

正反対のもの

正反対のもの

夏と冬と。夜と昼と。

火と水と。太った人、痩せた人。

雨降る日と晴れた日と。

笑うのと怒るのと。

老いた人と若い人と。

白と黒と。

好きな人と嫌いな人と。

同じ人でも、
愛情のある時と
心変わりした後とでは、
まったく別人みたい。

髪の長い人と短い人と。

風は

風は

風は、強いのがいい。

3月頃の夕暮れ時に弱く吹く雨風もいい。

8、9月頃雨混じりに吹く風は、とてもいい雰囲気。

雨脚が横なぐりになるほどに
風が激しく吹きつけて寒いので、
夏の間は掛けてあった冬の綿入れを
生絹（すずし）の単衣に重ねて着るのも、とてもおもしろい。

それまでこの生絹でさえうっとうしくて暑苦しくて
取り捨てるてしまいたいくらいだったのに、
いつの間にこんなふうになってしまったのだろうと思うと
おかしい。

朝方、格子や妻戸を押し開けたら
激しい風がさっと冷たく顔に染みたのが
なんともよかった。

9月末から10月頃に、
空がちょっと曇って
風がとても激しく吹いて、
黄色くなった葉っぱが
ほろほろと零れ落ちる様は
しみりした気分になる。

桜の葉、棕の葉は、
特に早く落ちるものだ。

10月頃に、
木立の多い家の庭はとてもすばらしい。

生絹の単衣は、夏物の薄い衣です。

逆に、（ここでは綿入れと訳してしまいましたが）

「綿衣」というのは冬用の綿の入った衣です。

嵐の翌日

嵐の翌日

嵐の次の日は、とても雰囲気があって好きだ。

立部、透垣などが滅茶苦茶になって、
庭の植込みなどひどく痛々しい感じ。
大きな木なんかも倒れて、枝が吹き折られたのが
萩や女郎花の上に横たわっているなんて
まったく思いもよらない。

格子のへこみに
木の葉をわざわざそうしたみたいに
一つ一つ、こまごまと
吹き入れてあるのなんて、
荒れ狂った風の仕業とは
とても思えない。

夜は風の騒ぎに寝つけなかった、
こざっぱりとしてきれいな人が、
朝寝坊をして、
寝起きのまま
家の中から少しいざり出てきた。
濃い色の着物で、
表面の艶がなくなったものに
黄朽葉色の織物、薄物などの
小袷を羽織っている。

風に吹き迷わされて
ちょっと乱れたその髪が
肩にかかっている。

そんな様子は本当に素敵だ。

そんな人が、
外の趣深い様子を見やっ

「むべ山風を」などと口ずさむのも
風流がわかる人だなと思える。

17、18くらいの、
子どもではないけれど
かといって一人前とも思えない少女。
生絹（すずし）の単衣でかなりほころんで
縹色（水色）があせて水に濡れたように見える
薄紫の寝巻きを着ている。

髪は、色艶があって
きちんと手入れされて、
先も薄（すすき）のように
ふさふさとしているけれど、
長さは身の丈くらいなので
衣の裾までは至らず、
袴の後ろにちらちらと見えている。

そういう少女が、
童女や若い人たちが
根ごと吹き折られた植込みの草木を
ここかしこに取り集めて
起こし立てたりするのを
うらやましそうに眺めて
簾を後ろ手に押し張っているのも、
おもしろい。

立部は細い木を格子状に組んだ裏に板を張って庭に立てたしきり。

透垣は、板や竹で間を透かして作った垣。

どっちも庭や家の中が見えないように隠すものだけど、

「源氏物語」や「伊勢物語」にあるように

そこから中を覗くことはできたわけで（垣間見るというコト）、

「見えそうで見えない」という日本人が大好きな

もったいぶった仕掛けです。

スキャナがないので図で見せられないのが申し訳ない。

後半は一文が長くて苦労した。

「むべ山風を」はご存知百人一首にある文屋康秀の有名な歌です。

「吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風を嵐といふらむ」

枕草子 コジマミオコ訳

<http://p.booklog.jp/book/38425>

著者：小島滯子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kira2life/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38425>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/38425>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ